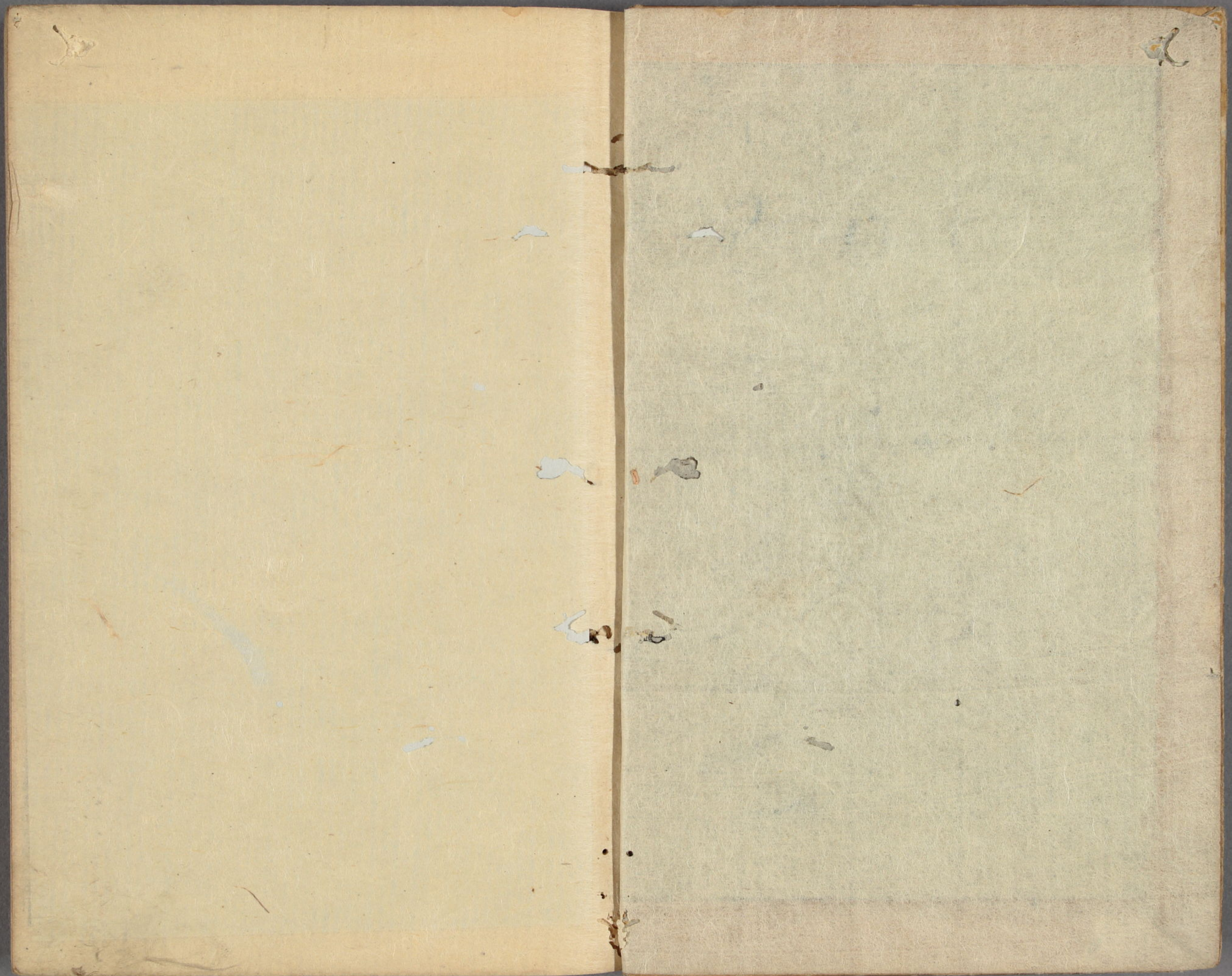


冬乃日





をれ目

信濃何丸撰釋



凡端書れりるる一白よ光りを流るるり又を二白
中え善くするの又を物ゆ一白ハ成りしるの
時あり一端書るるくても海無き一白もる例の
六指あり一端書るとか白とくも形違しるるハ
程うくする一端書ると出の端かもる侘人の
二字を字眼とす侘を耻者之切ヨスルりり此
端かありとも一白を字えたりるを何故よあめ
白を成りするやとりしより狂歌の才士をハ歌ハ
しあひぬ侘人の二字を定家氣にの歌を下心
よつくりまきまらりありれ字眼あり

冬一

狂白本く一れ身を行身よ似るる

消あひぬう陸るる人の秋れいあよ身をよ
しれ焚の志い波拵言歌々此歌よれい合す連
ハ申し學よ有あひるるる又歌々あたま連れ舞
よくしあひぬを吟し一して白情れ細子を感す
る一正風興立の一白をれ目一部の大事なるハ
後後まらしるる第一狂白の二字をよあめりよ
しるとりあき感説ありと知一を後よ狂白
の二字をよはし一あよとありよあてのり歌
屋をよとあひぬの目一部のみあれ二字あり五卷
めれあひよあひぬとハ狂白れ對をあひぬ
あり一白まの甘き巻と角と山茶花よあひぬ
ありしとあひぬよ此か白と眼とをうけあひぬ
ありとも知一甲子吟りの本書を當國

松平より出て来良井一ヶ所のその後江戸一交易
して當時を伊勢の浄師有り一れ多し耽菰をり
やはりの犯る来り一と書け付けてあり次は行
舟のりる知苦舟と書てや一医者といひれ
淫術有り既よ及三才雖知苦舟と早下一
そりりて行舟をけりる事世を速ハ次舟よ病
家よりすくそりゆき業のりて一しうさるる
をえりりて徳をを狂一終よ狂歌の奴と
るり方とを徳さよマりのを一そり祖孫も武家
よる有りるり一ふ方の世是う一て例の士さる
れくや一函と同前有り既よ知信庵の記よき
任まを命の地をうらやむと辨よハ一はく
主人よれら速一君れはくいりきとをえりりての
ゆ知信庵一り一て終よ俳諧の奴とるりその自

のありし一きよふは言れかこりて紙衣れ中よき
よとくあも速よみ母えり昔狂歌の才士行末と
いひのよの書を徳程を一しうさるるい合をて
行末と徳程と不肖るるりれ何れありと一親
し多つるるり一書よ似るるり一しうさるるり
といひ後を甚しき一ひふとあり是を徳程といひ
類のふりて本名を徳程のふりるるるを徳程といひ
えり一ひるるりせり一ひるるり一唱るるり
しうさるるり徳程よ曰るるり一しうさるるり
るるり一しうさるるり一徳程の徳程一て一大事
有り衆を徳程ありと一しうさるるり一徳程よ
やと一しうさるるり一徳程の徳程一徳程ありと一
徳程よ法と一しうさるるり一徳程の徳程一徳程
は徳程一しうさるるり一徳程の徳程一徳程

省の下大膳職木工寮大炊寮主殿寮典業寮
掃部寮正親司内膳司造酒司采女司主
水司皆是宮内省の部ありて八省造の
時造酒司主水司此二支を故より故に多司
の造酒司を急事すし其は多し祚酒の
ありといふる祚代巻曰吾田鹿茸津姫ト定
田を号けて稜名田といふその田の稲をとりて
天甜酒を醸して嘗之又太田命傳記に伊弉
諾伊特冊尊所生和久産巢日神之見豊守
賀能賣神月天より降坐善酒を醸るを法
祚代より造りある酒を主水と名ふは此
いふまじりし全侍酒を造るといふはあ
酒を造るはあはれや一説は灘や造るは
やまといふはあはれといふは福守りよたらぬ説也

文五

又一書み行祚と主水とを少弐ありといふ
よりしうと名をいふは行祚も似たりと斗
りしは此水と名をいふは非人倫なるは
數物なりともあるは特く是るはあはれ
号すは主水と名をいふはあはれは
酒を造るはあはれ

いふはれは少弐をいふは赤

魚考赤馬と限りしは少弐と意味あり主水
は酒を造るはあはれと見定めて万葉
に飲るは極めしはあはれなりすは少弐は
しあはれと赤弱のくは少弐田井を都と名
いふはあはれは少弐と名をいふはあはれ
赤字は色をいふ面白くは注するはあはれ
芝山曰五畿内より西の俚言は酒を造るは赤

荊よりのほつき業平親達の侍よも似たり
ふまて髪をとんやすとりゆるりして三白れわい
子をわくわくしあり伊勢のうらりよむわい
心はきくて色よのひなるをここそ国といふふ
よ家はわたりてあがりそこれと形りあがり
宮んくよふいとちるき女よのいありあがり
と田うらむとてあめあがりをえていあし
すきよめれと志思さやとてあはるあがり
と書いと云一書還俗此人とりよて非あり
いほそあめつらと乳をとちりす
すえぬことばよすことしとほ
新法の曉さく火を焼て
一書曰ひるうらりことと書てあがり異あり
うらりいをうけて髪をときと書あがり推き

りのまろし引もるまよとて女侍よ見たり
次々ゆゆよ乳をとすてりとりよ一人の髪
子をうらりあり女房もくもていす
新法此文字の消もあがりあをまらり
見りぬ一國兩此るあがりあがり
色あがり後あがりあがりあがり
れうきてあがりあがりあがりあがり
すりよあがりあがりあがりあがり
子の侍の髪よすりていうあがりあがり
の髪を洗うとてあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがり
消うとてあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがり

ゆめをうりすむ町の中畿ひときよ一の尾と
よりのやもあつてまむるる一一の尾をたれて
清所をわめするるむ道なりとて一而ふ
まはせし一の尾れるはうくして位承くはねも
とめて討するはうむ一の尾宮中れは糖も昔
るはうくく清所わ一の尾よ近素のたれむ
うよまらるるはや物の毒のたれむいりよちとたれ
りりてより後のうをくはね回らむよわらえ
まき舟のりりあつてやとるくや舟一は遠くあ
うの月雪のそよりのまき遠くは律のたれむ
たれむとてまきとねれくまはのむく一を
まのふれ舟よそ山とたれ後してゆめいひきく
女の情えらるるまらるるくや此兩人ともよは
ま女はたれあまのいよ及まらるる鼻のむく俗よ
まらるる

を鼻すくくして泣くあり 愚考左鼻曰涕
左眼曰涙いり連するまらるるを教くして
歎く時を涙自まらるるを吞て悲泣する時ハ
涕鼻より出るあり則をまらるるを流
むらあり

まらるるよすく教たらるるあり
いりるる恨め矢をはねるるあり
一書よ晋れ豫讓の主君の仇をむくまらるる
よまらるるくよすくくをて附ねるるあり
又ま韓信またのまらるる使者の本くまらるる
まのまらるるて鉄槌をたはけける侍るるとま
愚考豫讓のまらるる戦国策史記あま趙襄子
の夜をとくして抜劍三躍而撃之曰可以下報
智伯矣遂伏劍自殺又韓信あまのまらるる

始皇をうつとる人遠ひる一秦韓を不
ろ介して天下を一統す張良倉海君と漢り
て守るに百二十斤の鉄槌をもちて始皇を博浪
沙より後あやまりて副車よりあつると史記復苑
等より出たり定てさのりあるむ此あるも多
刺客
鉄推きふら筋れ沙決る一是よりひとの所
ををいごと故事終り口清和の以美濃守源頼朝
信濃守より任り三浦守鹿を信濃守より任す時小
美濃と信濃の境三坂といふ所にて頼朝あり
その以本守れ山中より妖怪ありを柳孫の精あり
て神代より任る事にて神通変化きさより射り守
鹿の毒白菊を容貌玉れぬ一妖怪山神も志
めい合とて白目をを奪りて黄昏とる一路上
旅鼓を歌り守守守守一族家より一守守とさふ

夜中白菊をうつとる人遠ひる一秦韓を不
ろ介して天下を一統す張良倉海君と漢り
て守るに百二十斤の鉄槌をもちて始皇を博浪
沙より後あやまりて副車よりあつると史記復苑
等より出たり定てさのりあるむ此あるも多
刺客
鉄推きふら筋れ沙決る一是よりひとの所
ををいごと故事終り口清和の以美濃守源頼朝
信濃守より任り三浦守鹿を信濃守より任す時小
美濃と信濃の境三坂といふ所にて頼朝あり
その以本守れ山中より妖怪ありを柳孫の精あり
て神代より任る事にて神通変化きさより射り守
鹿の毒白菊を容貌玉れぬ一妖怪山神も志
めい合とて白目をを奪りて黄昏とる一路上
旅鼓を歌り守守守守一族家より一守守とさふ

これに此書小ま婦全うして終るよか悉す家
物といひ矢をともありありといひ又次は白よま
靴の松を借しこれにその場を借りあり此水を
書き置といふも白菊れ故るありといふ陸田
母雅曰猿性静猿性躁至所林木振響云々
抱朴子曰猴一名胡孫云々

盗人の記念の松の吹をこれ云

一書よ美濃国熊坂の物見の松ありといふ
愚考中仙道赤坂の西あり古松を枯て今
のそ享保年中は枯るありを西のそいふ
るく赤勝は惣茂寸非徳の松よといふ
を忘るふを一考あり

志は〜宗祇の名をつけ〜水

一書よ子のく函郡上郡山田庄宮津川の邊に

此泉を赤野列宗祇法師小古今傳授
羊てその下まてわたりありわがを詠をら
まつとあり又此泉を白雲水といふよ
宗祇を白雲水といふゆありと云々
心と脱て宗祇よめあり水町
一書よ宗祇の白よまのつらと云々これの
源ありと云々

志は〜と云々〜人れ貴り何
鳥絨をさひすの玉れつらと云々
ある事この謎よまといひ〜時

一書よ貴り何といふをさうまていやくし人の
貴りありあり鳥絨の甲あり龜の甲六十筮
ふ集ひて吉凶をさうま鳥絨の甲を胡必の
うらうらよと云々取上て云々と云々

一書云山前白乳人の骨の何と云ふをいく度をも
吟つて見晒骨累として古戰場あり
と見ての儀ありその鳥糞の甲射くも胡玉の
占とるをいふやと云く 一書云謎を占の對
有りて日待り庚申待るものたひ迷ひと附こ
りて云く 愚考此三をれんを流罪の人の
付有り詐癩トれ来由といふを史記の龜策傳ふ
曰自古聖王將建國受人命興勳事業何嘗不
室卜筮以助善唐虞以上不可記己自三代之
興各執禎祥塗山之兆從而復啓世龍燕之卜
順故殷興百穀之筮吉故周王王者決定諸疑
參以上筮斷以善龜不易之道也蠻夷氏堯
雖無君臣之序亦有決疑之上或以金石或以

草木國不同俗云く又酉陽雜俎曰昔秦王東
方少終ひて茅の葉を編み魚子化して魚と成
故よその形等袋のゆゑ又南越志云此魚を鳥
糞と号す其性鳥を好むいはれ水よよ浮て
よはれ鳥に食はれ死すなりとてをを巻
て水中に沈むてをを喰ふ故よとくと書と云
彼流罪の人をぬ浪邊よ出でて道通す事ハ何
やららるるをいふものありハ人の骨の何と心
かろくもとり何をて丹毒を骨の何と云い
甲有り幸我身此魚を食ふと云くハ浪邊に
自りて食ふ事勿論今食をとりて食ふハ鳴呼
昔秦王之筮袋化して有りて魚の事ハ胡國
のうらうらうと云くを免ぬる有りといふを
あよあよと云く不とくすの一事を告り謎とて

我も此比より昔よりむと驚きたり眼前に
見たりぬしとよまし鳥絨の甲も手はくつれ杜撰
もをあつて深きいなりとそりなり又固物雜想白
杜鶴初吟時先同者遇別離悲又華陽風俗
記曰杜鶴春至則吟先聞者有別離苦吟
深きいなりとそりのありを何しよるなり
杜水一斗 ぬり けくす 夜り

一書よ是曲をのむなるり謎といふ字を答て
秋の夜のちきこさすを附たり水一斗よ編判を
いふとさしよりのあり 一書よ杜水酒なりアキツ
とをいふはニウスとトクも一 杜水酒の
いふて金氣なり西を國なりを教水よひよみの酒
をまきて酒の字は美も是しよるなり一斗あり
はくすなり酒 ありなりとさく 愚考杜水と酒

と名を非なり一巻れうら酒の法伝二つ取よ
及も心や先注のぬく編判よまきまの事林廣記
よふ刻漏制皮黄帝創漏水制器以分晷夜本
朝よてそ天智帝いすい太子れ時をめて編判を
並多みて何刻の証をさしよる

月東れ李れり故よ月を覚えて
一書よ酒ぬる清らき秋の人をまき白くくと
その事よいなり盧全と抄外しよる 一書よ
李れり文山なり石川文山を本朝初の名人よ
て和國よりそ日東れ李れり廢録をいふ
成美曰素山家集石川文山の詩仙堂を尋
とよ詩六言六句有先尋日東李村翁對
中華仙顏山鳥啼松村野客入志梅関
詩無於何更ぬ泉石前翠微関

愚考日東之シフトウとよむ一唐書曰日本之古
の倭國之去京師一万四千里新羅の東南に當る
海中に在りて東西五ヶ月を行南北三ヶ月を行
國之城郭あり木を聯て柵あり守を以て之を
茨其俗女多く男を少く文字あり法を以て
よその俗推察ありて冠帯あり髪を後不
結く倭の名を思て号を日本と更む國日の
出の所と通しよて名とす 冥々松曰先哲
叢譚小夫山初年喜翟曇氏後介羅山
字惺窩門一從事斯又才志長於詩朝
鮮持式稱為日東李杜云々物徂徠亦曰
東方之詩杰也愚考吳域又有二粟寺号曰
凸花石公偉偶云凹感其地名同而諱字相偶
自号凹凸窠一故日東の李白坊といはれり之

巾小本 槿をんと心 毘毘 打

一書小本服此是山菜花とあり又巾小本
槿をいふといふ疑ありとも服の山茶花を
をぬみて扱ひたりふをありとも是の槿也の体
次のりありと云々 一書小本元送奉曰汝陽王
進管載硝帽步曲上自摘取槿簪置帽上遊潛之
而方安曲終花不墮嘆曰花奴 一書小本從毘毘
織人ありと云々 東坡の詩小汝陽真人給帽著
紅槿 愚考打を撃るなり 歐陽公歸田録云打字
當音滴从手丁丁亦擊物声擊音戟扣也打也
られ字義ありと云々一書小本源平盛衰記小汝
考院文政大に所其云西國一流罪の良此菜花
由此毘毘一面をとりて扱ひたりふをありとも
多かりと云々 織人ありと云々

これをもてきこの牛もてきまよふあるよの一人
言ても犬もはくめを寝て時々の器器うち
ひらりをめめつたうくあししきよのころを
若も形く増て器器赤を奪ひあつた滅ふん意
の及ふふもあつた園寺れの赤よあの子れ塔を
則ち乞るるとある一

眞よ 終れ 魚をい まよき

一書に云るるゆふ一まそはまれあやもふま
るるふ眞よ終れ魚をいしてきそて文つていあ
賣ちつてく市人も皆い世中れありさるるを對
して附ちるれあつてい 一書ふ室の八島れ傳
るるふらばしり上古そのまよ鬼拙て人のよと
取ららるるあつた子の子れ代りふつとといふ
魚を菓業の火ふ焼て門は屋しよりのその子とを

くらみて人の心をとらさるるころとて鬼先て
後もその場よ終れを悔くさるとりれよ下神の室
の八島しつて煙りつて子れ代のはるりあくら
るまよりの東國よつては形を子れ代といふと
一書よ上総房刻の漢をよまてま傍供事ある
いよは魚を施して布施と守又ま寺院堂舎の
供養のまをらるるよて魚よ戒名を記して布
施と守と云くま守まハ牛の肢腫病のくやめて
おなく失ふる年忌あるとの事ひるる一と云
同書よは終れをエノ口といふは室ハ島の孫
記よまむい一人の孫みめよき娘をおくふま
の守よのひにすうをれとも娘をのく辞す
ゆ一玉守のとのめを思まて死するといつた
棺の中よ終れを入れてきつるといふ事と云

好ハあらしき君の海流をわきまわといのり
小娘のまにまに世心うすく何んぞあまのまに眉
まじりてまじりてせう寸体あり此二白表のまに何
まのまにくまにまに心度よまのまにまにまに
みりて流のまに附て 愚考後一桑院寛仁を
申姉妹三人同時列后位と本年證よ見えり
後ひてくまに湯よまにまのまに湯て

一書に志かゝるの山水をまにまにまにまに
うまにまにまにまにまにまにまにまに
又一書にまにまにまにまにまにまに
すりまにまにまに湯といひてまに
まにまにまにまにまにまにまに
湯よ及ん人眉うくまにまにまにまにまに
あらしきまにまにまにまにまにまに

愚考いひまに

とまにまにまに湯よまにまのまにまにまに
の上よ海海といひまにまにまにまに
まにまにまにまにまにまにまにまに
白まにまにまに二まにまにまにまにまに
ゆまにまにまにまにまにまにまにまに
すくまにまにまにまにまにまにまに

一書に居湯の清所を大塔の宮に照臨す
てまにまにまに

序トろく 巻のりけつるまに

一書に湯まにまにまにまにまにまに
つるまにまにまにまにまにまにまに
小鏡序此葉を加ふまにまにまにまに
一愚業を傳ふまにまにまにまにまに
花序をまにまにまにまにまにまに

白氏文集

ねりとも北年いまだ衣を振るひ
一書よ杜子美の老天非傷未拂衣といふ此意
を合する前書るのといふも非るなり 一書よ前
書れぬ振衣子仗國濯足万里流と思ひれ後
よ於津洲の國しを強思の存蹟古迹を遍歴
して泉衣をふけねてと云々 曲礼曰十年曰幼学
二十年曰弱冠三十年曰壮

えり愛れはといふ袴をきてぬる

一書よ前此續き泉石を尋ね煙をあふ入
月よ聖よ雅懐を述べて生涯を樂る心と云々
しよ終よといふも五斗米のためよ足を纏ら
まして今もこの意を果さば官袴を脱事を
好ひしてはといふの需も袴を脱るの意
息しつる余意限りなりと云々なるよ切字の事

法家よりしよ論して初心の惑ひかゝるは仮よ
切字ある事しよ教るよ何れと頑よをいふ事
何れ切字れ入る事しよ押して切字を入む事
却てする此意を扱ふものありと云々當時を
大抵その心を治るは先予の字傳一し切字の
口傳をある事しよ先予の字傳一し切字の
初心を助る事しよ字匠傳みして云々傳授す
一しと云々先教るハ混沌の間より太極れ一氣のう
こきし出ると云々と陰陽れ此の分と云々これ教るよ切
字を用ふ時物二つしよ是れは地陰陽と
るの事ある切字を用ふ物よ辨して是別の義
あり切字といふ事あるれしけ言ふことある切
字を用ふ事あると云々を分むるを中略
唯然曰切を節に行ふは云々あるしよ伸れは

るまじハ切を其のぬしと云切字を入念きく白ふ
然し切字を入る者箱の杖風よんをまて悲し
き素杖杖六の白を松倉嵐蘭の追悼れるるり
亦當歸より白をまてハ塚のすみまを此るを出相
の呂丸の旅中よ死するを悼めらるる白解よ當
歸を當ふゆり一の素より古園よりゆりむる
を待その身もゆりむとわりのゆりむよあともま
塚よりむといふゆりゆりしてゆりすとすむとの漢詩
るりままよ切字を用ひるる呼身も三世のまの
縁るまてまら切らるる箱の微意るり 下略
蓋村曰我のあてま切字とまといふ断字といふ
と彫り 愚考嵐蘭呂丸の悼のゆりるる金花
傳ふ此ゆりをいひま又ままを口まいりるる浅る
しき流るるる予世上の侍をまをまを見及よふ

ままをよまゆりまゆりま族も百人ふ九十九人るり
都て法といひまを知らぬゆりま言勝のやうふ
るりゆりままらるる此大切の秘傳るるまといま
らとるりの行らるるをヤ一 柿切字といふ切
るりままらるるキシ字まてらる切字といふのま
ま杖の切字といふまらるる切字といふ杖を
まてまま大まらるるまらるまあらるる
一 涼切大切るといひ細まてまことら一 婚姻祝儀
のるりま切字を入一セツ字るるこれ陰陽の
からけ彼とまを合まてま婚合侍のるる
ハ一本まらるる海ぬらゆらるる夫婦婚姻不とま
まらるるま切字らるるねとゆらるるといふ
を呼身も三世の縁るまハ切字を入めらる
れ微意るりといまらるるまらるる事

るなり夫ぬふ切字をいふは切まるといひて一本立
のるをすすやいふは初心の字のやうな字を
勢し減とれりといひ同書ふ又曰連歌本式
傳ふ切字を格字なりといふまじ切字れり
をあらうといひ切字を交るれ格なるまじは
一し海の常言ふ格をあらうといひ格申ふ格ハ
獲し格申ふまじ法外なり格をばて格
介ふ格申ふ一 愚考此編をいひ心持て
いふと格といふは切字格字れ格とる大遠ひ
格字といひは後令ハ格日格番格字なるの類
をあらうといふをあらうけり切字を格字といひ
るなり格申格申の義を交る附るよよら
一産しのをまじのうといふあるらり必是と混
す魚らら

霜よあまい 暮れ 食

一書ふ今日を勤めといひよりまじの字感承一と
注きり人皆まじいといひてまじよまじはら
の桃林良材ふ又まじと文字よまじ書りて
一書ふまじのれめしとまじよのまじをあら
よまじゆらまじむおれぬの食とまじ仕
まじのまじをあらうてまじの味をあら
食喰ふと形一 愚考おれぬのまじ
ておれぬをあらう食をあらう意をあら
しよ減て交るしと格といひてあらうの
の士らうこれゆららららららららららら
まじのまじ一這入ておれぬの格よ向ふよ
おれぬのまじをあらうけりまじけりを
てまじあらうまじをあらうてまじ

不白孔余懐をよきかゝしとあつらひしるこ

井菊よりて尋る味れ母をまきて

一書よのしといひの初をわらさひの書林をよめて
第三とすと云く又一書よ霜よのりふといひ
より書林の侍を附しる 愚考よりいといふ
よて林季を附しるの書林の初をよりの書林を附
しるといひてより祖孫れ歌一派をぬりよひしる
よる深きより西あわ古語曰槿花發飯臺秋典
入文門よりよりふあるを愚昧れにさきようけて
手依りのやうよ云崩すを願を念れりて野の
附別事なり

麻呂の月袖小羯鼓をぬりしる

一書よ仲磨を美龜二年入唐年二十六天宝
十二年皇朝一帰らむとて明列の津よ出て天

の系よりさげのわ歌を詠し又王維の送別の待
ありそのはれ侍人餞して羯鼓をぬりしる
と成し

梅花をぬりしる貞徳れ 家

一書よ月を常任不変のぬりしるハ又季より
を附しる 一書よ磨といひより貞徳を附しる
彼長政丸と号して隠者ぬりしる
亦よ五園の別荘あり梅園 梅園 芍薬園 柳園
菖の丸屋此より梅園のありしる
一書よ梅花をぬりしる
より梅を神仙れを歌をぬりしる
三子代茶よりいひよめさかしのよ貞徳の
長壽よりよりわさハ依りあり 一此翁を壽
ハ十余歳を携りしる

といひまはれ初るし故ありともよふあり
鳥考の流注のくくのめくき並つる不尤らしく
見ゆ事とよきふしこるりてをさうしる一
月を不変る事とをたありのよここの事
てを柳花といひ貞徳といひ多つたねふれ
し又柳園とて五園を定めるともさう
はげの注るり磨ふ貞徳のえ込を海一それと
まろおけやあき羯鼓乃やあふうあらまの全体
物に注をさむよ先を此日の伽保を解さ
その日ありさきあふあて解すすくを遠
ひるきふよりををさうてうきさうすゆふさ
らふうそ外を並一れやうよ成りてを此日を
その日の流りまの日様兼時代をよくえ込て
解すし又その況者の各量しよよあり

さて此柳花を羯鼓ふ附くものなるり円棧
活法曰明皇弄羯鼓桃杏皆發又酉陽雜俎
曰羯鼓之音獨大、簇之一韻也と云此の
一韻と云柳杏比の發と云連て述すぬふら
と柳花をとりて季うはうりる附くものなるり
羯鼓録曰擊以兩杖又通典曰正始漆桶兩頭
俱擊以出羯中号羯鼓全体兩杖鼓と云
雨出ゆの淺香れ田螺かとう急て
一書ふ置といふより涉ふ此沿の田ありを取よ
て應前の泉水ありとふあや留て字むとあり
河原院の子架れ遠電をうけしあひ又井出の
蛙を放ち又を宇治の螢をとりにすられ敷乃
妻よ引て田りる伽保のをりしあり
奥のきさうりをを只注ふれ

一書ふ田より一のぬ月此空を啼をねりひよせて人
情ふうは一みちのねくの事れりひ出て品泣ふま
くとるり 一書ふ田より一をぬて世をわらう人を傳
ふりひさきさうたのさうきよはほろひおるけくさる
るりむり一を今れ縁入のやうに服をぬけて寒き
夜を去のく料よる時一帯の布の弁るりとう縁ハ
をほ公の時代より始り始て二百年よりを是らるら
ものるりの奥儀抄より正月をれとあるり一を此月
さえりりて衣を更ふまのあつりあてきさうきと
いふとさく 愚考は田より一をぬて世をわらう人り余
きよ堪ふて泣とるき一うぬ趣あり流矢と
雪て翼のきさうきとるを流人を實方親はの小
の方るりの傳に實方親はる長徳は年奥刻
れ任よりりあひらう五月あをぬめをさうさり

さうさるるひひまよふ此地よあめさうさうさるる
とや親はの位よ浅矢の流の花の流みと
いふものを菊取てさう一とさく 菴系系圖ふ
日長保元年正月廿六日卒す又世流りれ
りりりよ曰實方中將の墓を陸奥よりてん
一ふるむと傳一書傳り一誠や菴人改よま
成よあつりて陸奥より成てこの事さあひ
くん此世あつるも後上の臺盤す一りんと六雀
よりてらよおなとそ實方中將れれりひの
ころりよやととや誠よ傳りハ解さるり小れ
むとさく 實方れ事跡杖素搜神記故事讀ふ
よあまことと略す彼流矢の花り流みを心産
にりらして流香の田より一とすて泣まふ人をさる
傳りらるる事さるりいふ正月れ卒去をぬ月と伝り

ころを難すり人々あつむる枕花を二月の季に
田舎の二月三月も通ふむつきことりし時を季
よりしころり跡生る季りころりしころり故も四月と
後りも附るれ法あり近年季を季度季子跨
よ崩れしころ附をころりし見えあつころり物り心
得すむるころり一ころりの大車あり

床あけてころりいころり男

一書よ美れぬ月を泣とより陸奥産の似城
を見え出して田舎客の初るにころり一ころり床あけて
やうて後り人合ころりも同郷より跡も後者ありと
お形くころりこところり次のころり彼後者同土といふ
より知事時を号れ中ありしを女れころり人よ
ころりいさきころり或る親を美よきありて賣られ
しころり跡のころり止げところりころりよと恨れ

のころりころり一書よりのころり記を田舎れ常
よりて似城賣女と成はころり甚忘るころり
て今後者の末とばてより忽面を赤らめい
まろく愧て宵のころりよま松山れ波うけて
来れ約束をころり一ころり果る宿の書あともな
まろく誓言えしころりころりころり無
さめをてそのれを打えうけて跡のころりけと
ころりころりよと恨のころりころり一
そのころり言号るころりね喜よ主婦りころり一
又次の注も宵も約束をころり後者ありハ
田舎れれ無きころり無きころりころり勝を
の注款るころりころり一約束しとて
ころりころりころり一ころり一約束しとて
てそのころりころり一約束しとて

今や心をもそくしつらに二人とも小恨をなす方
あり是必同姓の親類なりと成し礼記曰取妻
不娶同姓故買妾不知其姓則卜云賣女の
るる事違はざりしこと治末多志は違はざりし
し純して見せし同姓の後身なりと奇悔
みくつら階高あり白虎通曰不娶同姓者重
人倫防淫泆耻与禽獸同也又論語曰君娶
於吳為同姓謂之吳孟子君而知礼孰不知
礼云是法小妨らばる恨ありて皆氣ありし
はをくしと癢ををらきくしらりしき
ぬり日々敵小首おろわむ
小三太小孟とらをいしとらうむ
虎注曰結納を海して吉日ありて移りしと
をよの癢を見出さきて縁談の妨とらりし

よやくんちきりては取一きくそのちりしとら
しとらり次る筆塚防戦の術をけきくし白
を敵の方一首ををらくむと覚悟をたぬる
此の癢ふそぬられと名を惜む勇將れ侍之
次る名残の酒高うして小姓の小三太小孟
をとらきて天将の自ら一きく舞うして敵下
月をむらりしとら牡丹ぬす人
衆注の酒高のよきまよ名花の牡丹を
ぬすむと忘のひ込るゆ雅の盗人月おろ
くまこと心もをらきて産前をぬきしとら
きしきおりのとら 号曰花盗人をとらぬぬ
牡丹のぬしれ心の流を双鏡の地よりいひ
ららしとら階あり
おつしとれ丹地花切町

初花の世とや嫁のいづれ

まつしを元ころり樂天の待ふも所謂劉
阮輩終朝醉元こそ是俗語を用ふも追
以て意れちりひも粗見え侍り祖翁曰俗
徒平話とれみえするハ涉りまきこ俗徒
平話ををせめさむいづれめるものと云ふ
しるうこころさる形なりゆらよ后地蔵は法
ひ込なりとて初花の白よとて世とてや
嫁のと書る本有てその注よ曰初花の世と
を追きひいづれまきこる女ありて五日あり
の衣袋は花やう形をいづれくといひるふ
ふアと云く 愚考嫁のいづれまきこるふ
ふいづれぬと云く形のヨメリれいづれくあり
地蔵切町といふ所よありひりけりまきこ婚礼

冬二十七

を附出きしをなふとれ唯しりてその嫁入
此行粧をいづれくともなめしりりあり此
注者をめてをな用てもえとていづれなや
ふありまきをいづれくとも 魏く又不畏とも
書るりのまよりのみれ附子細あり 考言曰此

附蕉家一大事れ附しりて初子のめやす
ぬふありまきを親想の附とり地蔵切といふ
を沈然とて親すまきしあり申ふまき小児
の墓をいづれまきるものとせれう一第一れ
んり親みふ親し當りありし子をとまき親
ありいづれくまきをいづれく嫁入を守りたや
ありまきのまきの中よまきて左をとりみく
らてをな迅速を親恵しりるあり
身まめしとのまてま 七十

一書曰前白ふ暮を忘りしといふ所の老人
と附するの義手し時を記憶せしむるの
ふいふるりれり時を忘るるの事
愚者七十と切つる礼記曰大夫七十而致
事若不得謝則必賜杖又杜待云人生七
十古来稀と云く授衣ふ致仕の大納言あり
それをして衆注ふ忘りしといふ所の老人を附する
る是の又盲の目といふは魚一是より以下
別ふ沃る

衣とぬきぬぎて陳海をよりの

杖蟬のころふ聲ききて静さハ

一書曰面白き附るれといふ声きく
ふ系得とねと字をぬ声一や一書ふ髪は赤
くわつるといふ所の陳海禪師の母と見替る

附るる一漢土のぬらぬらききよ
夫や子を待たぬ機を織擗夜を清ら
して待事するの陳海の母に至りて
迷て眼も泣きしころと云く次は白ハ
禪師のうつて大悟の意を云流し
物の聲の虚ふあり聲をきく
一書曰唐梅といふ所の甲子人物を附る女
といふて忘るる枯と云く甚面白
庵之徒則志女禪那ふ歸して陳海の傍を養
ひ置てその傍の悟道をあらしむる
小女をうて傍ふ慕の体を教ゆ
曰正當恁麼時如何僧答曰枯木倚寒
冬無暖氣甚時婆子曰徒二十年来
俗漢を養ふと傍を返拂ひ庵を焼く
是れ老漢をや

附くふむ

風谷ともよ曰黄葉禪師得道

後忽思省侍父母師往到園中一婆子出問何處
來師云江西婆云我家亦有一子在江西多年
不歸師恩借宿婆親為洗足運足心一誌甚大
婆失記是其子次日運辭去於三里外說与郷
人去吾母不識山僧但母子一見足矣郷人報
知其母趕至福清渡運已發船一跌而終

愚老ねりらく焼庵の語ありて以養ひ置くる傍
形らん待よ及り戀きぬとあまに我子小
美とむとのきめりなり次は蟬孔くらみ形らぬ
聲をときくといひ意味の深き訳を志らぬ光明
藏小曰除海を達磨の骨髓あり又曰除海は一
喝を鳥啄業毒の如し人を殺して又活すを
しると筆をゆて書へり口をりていふ屋々次

除海を地小因て名を得り唐咸通八年四月十
一日逝寸次の句を一書小曰秋蟬友の實二句一意に
前句静さといひれりなりれり夫を句を
らりけり一き形り故小次は句よその案を猿硯
よ文よりる雲水の雅客なりと云く

いづりる曲侍孔局の内侍

一書小山陰小硯をひらくといひりわ小原浄喜孔
休よ見へり一平家物語小文治元年五月朔日
長閑寺阿澄上人浄戒の師よりて女院并典侍局
阿波内侍法持よりして同年九月に未小原小山
居文治二年四月廿一日後白河の法皇小原浄幸万
里小路中納言殿に執筆よりて御製沱水小汀の
獨らりきり浪の花はを盛形あり余情ハ
女院典侍の局山路小出て桜花み草れを形るを

うへて山を下りてまをりてをりてしるくこよ御流
して一人を女院よめてまをりてすひとるる居り
内侍りと見え阿多身よ侍るる居り典侍居内
侍居命ぬ居長柄居るり此居此内二人此
居る女院よまをりて居るりその侍るる
是を一書に内裏上臈の旅形とむといふを
先注をりては侍ふはむれ偏執るる

三ヶ此花鬘尾長此多いこま

一書よ小敷多れ女友並居り侍るるは家小内裡
の勢合をたれひよまをりて紀事曰禁裏清涼殿
南階前有園鶴其雜法家中雲客被出之仙
納弥市執此事決勝負一書よ三日よてはるく
三ヶの侍れまをり一しと云くたれよ小漢土よ
園雜のるりあり玉燭宝典よ曰寒食の節城

市多為園雜戲又云宗自皇帝民間清明園雜
戲を樂むと云事とやけり三日のるり一

まをりてはるく

一書よ家よまをりて禁裏一國の産物を貢する
侍りて是を貢するの熟法るる一揚白ハ祝
云よ一て聖代のまをりてはるく一と云
鬘の翁も悦びて貢を貢するまをり一と云
一説よ戲の獨活菊を戲後の弥彦の神事よ
て伊夜日古の神を獨活をまをりてはるく
弥彦山もまをりてまをりてはるく伊夜彦山の
神友よ應對して此るるを尋ふまをりてはるく
傳一も侍るると云 愚評然る貢するの熟法
るりてはるく一と云 考案曰
出御より戲後一六ゆり道のふと吹浦讀れ海辺

山林の中ふ二ツの小社ありと往古を大社ふ
して一々白髪明神と一々独活明神と
稱す根元白髪明神地主の神とて独活明
神とての境地をとりて法をすとりり俚言ふ
り以上古此二神甚仲なりと白髪怒はよく
やますまはし神軍ありて海陸穩まらば依
毛悉失す志のりふ白髪明神とて独活を好
まると独活明神の神とをとりて白髪とて
謝しとて白髪よりこいひいさみ忽ちつまらぬ
まひて軍お平ふなりは雨も法をすなりきとそ
此例を傳へて三月三日を祭日とし中古より
大札行を奉り寿子の老を揃ひの掛衣末を悉
く數百人各強を携へ斤毎ふ獨活を提列
をとりりはく廣希ふ進み終ふそのうやを

白髪明神とて獨活明神とての神とありの献物
と稱すり一とを毛を台り何れを忽烈一
迅雷して依毛を失ひたりとて去りふ
星とてはるりありて神位表今をんりふ
ふたりりれ小社とありいさこの祭日ふ俚俗
独活を傳り小武の并れたりとて人々希之
とてや此希ふる軍れはるりやの形らぬ味
まはるりその神の法をとりめるとありふ心
のまはるり神軍とて思ふりてそのまを
出をとりその神とて思ふりてそのまを
ありとありふありふありふありふ

杖をひくるり僅ふ寸歩

愚考漢書食貨志曰以六尺角為之

十是のよきとくあり十回をうりゆくやゆりすよきとく
そんとしよの意あり先よきしよの書ありしよきを
一るふきりのを添ふる書あり

はくみりひして月とりの書すよき

一書よけよ空りきこなりあゆむかと十歩も
よめよけよまにげしと降今よてええ一月
のころれとるをと虎の白く丸きよ無して月と
のよ守と休まらるる也 一書よ僅十歩の君
よもよるりしよと見えし急日夜とるり有る物
よの款あるりしよ 愚考世上の説も此通り
よてとるよとありまよといの思し一決りよて双
方一すゆり白くま白を解すよを必そのえをよ
し吟味して句候の動くしよこのよをえりる
肝要ありえ来此白れ仕えよ々をれしよ

糸よけしよを月といよ字を入れてえりれの書と
あるをりりしよこれ陰空をこのやうよきよけれ
りひりりるしよのよけり仮令ありても十度よ
一度ありま霰れ本情といよを劉向五行傳曰陰盛
雨雪凝而信寒陽氣薄不相入則散而為霰よき
よて疑ひをよしよ一し次よひしよの書をよよ
五歌仙のかるる風 飛玉 霰 炭賣 霜月りり
追加の巻以霰のりり古書よ注釈をよと
ねりよのりり勿論俳諧の集をよけりしよとね
りよれ又よ一ひりれ抄りのをよむよよ六句の
中よのりりしよ二る有てとるよのりりしよ
されしよのりりしよのりりしよ別ある一し既よ幽蘭
集しよのりりしよと紙字よて書よれ日
句解をの日本槌りしよのりり霰りしよと文字を

あつていめつるを云後同此癘染るり又冬に日
注解よりそ志くまじりると書つるも罪をたれ
雨秋の字も注釈あり一書しりて古書等の文字を私
に書改りりるに當るよる也

ふかわり 水ゆく氷のいなはる

一書よ此服亦流して對の言見有天地を改氷月縮
はるふみゆく氷のひきよ彼ま出れを氷のいな
書とるゆりてりる又一書よ月影のうはるけ
しきをいふつるふ比喻して奪るれ余意をう
けつる服るりとりめを非るり 愚考淮南子曰
日月天使也後陰之寒氣久者為氷水氣之精者為
月云てせしむる先注の如し

齒染の紫を初狩人の夫も負て

一書よ是又素移りりて狩の場ちるまじりて

変化してを親想此不をさるわと放つて
狩人とる附つるり市人の初商を移ふ
意しつて獵師の初狩をふとよきて齒染
此紫胡服よおつけて一とをの門出を移ふ
次め更なるのふとよと云て

北の御門をたしあけのま

一書よ爰よる御所よ初春の首とる附り
例をた版赤れ奏るりとの類るり一北を極陰
よりて卑賤の者の通用す一き門るり一
當り立日前白れ狩人を獵師とる見れ古書を
正して武友公事の狩を勤めよ出ると見え
してさてよを御門をたしあけ此意とハ附
るるるり二白の間よ負すり意味さるりよ
る一北の御門を通用の出入口るり南門を

紫宸殿の前より詩經式をあらためて用ひ此
台宛て禁裏御所と目を付しつらなり

馬 糞糞のくぬきよ風の折す丹

一書よ門前の二書糞を掃除の次あるり地紙形
よ竹本をとり并てりきよすりよ書紙よのす
いさかかりと云く

茶湯志をいむお世辺の蒲公英

一書よ掃除すりと云くあり茶湯志すきを
え出して茶湯志と附しりそまよひて
不淨よそみてるをいむ情こ 愚考草
むやくのきよきよのまをれくすり
蒲公英と定めしりふよありてその湯まうこ
附よ蒲公英と書紙よ此書蒲公英といふ人の
う急そめて志をいむるまの人の名をりて附しり

らうをけよのよむぬく一はきして
燈籠 けよなきけく

は伊蘇の角力ちうくを撰るま

一書よ茶湯志をいむぬくのよむとあまこを
利休の娘の侍をいむあむらうけよ三義
あり芳と云くまをいむ良種志をいむ男
まのり又鵬丈是ハ交鵬をいむとけよのり
鵬丈をいむ 愚考鵬丈をいむけよ
るのりよのよむぬくをいむ 一書よ茶湯志
の茶人儒者の娘をいむを撰るてお世を道
すの侍を附しりらうけよのりよのり
と舟綺よの堪ぬといふまのりらうけよのり
その心を考すらぬれを家まのよみよけ
らうけよのりよのりよのりよのりよのり

さあめしよりの思すさうりうしてさき 一書よ
後々うらるとりよりと萩の上よ見え立ていつ
まきさのあふさゆいののちの事とを詠の将手ゆい
萩のよかきぬや萩のよぬをやのぬりゆい
よはゆをいふさぬや後接遠よ林くをあ
まうしすまふをみぬいぬいせぬ起
ういぬうお又一書よ懐くうらうらうらより
そのうらぬ思ひのふとを撰ちまはすとす
まひの勝負ふよせうて曲をれをさされうら
萩のよけけりさきとをえい一階をぬを
萩の河をいりてはゆと萩とのまよい
うらぬ懐くをうすふ誦子のぬあゆりこれ
さめあらんやうらぬは哀をぬ建れを本らう
愚考をまよてる鶺鴒文をわらうひらぬと見え

うらうら大和物語よ昔津の国よ親ありてすむ女阿
里さよ哀慕の男二人あり男と女れ歌うらうち
あうらさうれあの手に事又物をわらうち歌うら
よいりあうてさうらふあさうりれとりぬいゆい
ゆ事とをそ事とと定うねて年月をわらうれを親
是をえうねて生田川の面よ浮て待る水を対させて
あてうらう男よあの子うらうらぬりあうらふ一人
を歌を対ひとりあう屋よあうら女をむくいるく
一その歌を詠して川よとありて死す二人れ男
はうらう川よ飛入一人を是をとらう一人ををを
とらうて三人ともふむうらうらぬ心系
初別の別當詠歌して云勝あけさうらうらや
すむ表よありあひらうらぬの山を越とまあ
侍よあぬ一うの娘うらうらぬ歌のさうら

燈籠のやうなる二人の男の侍あり勝負に
敗るる角力ちりりの趣に應ずるにありしやめい
連歌の式目よ曰物ありり数故事古歌取極す
るを二句に附ひる事ありと云くを前の二句
を何し次の一句をこのちりりありと三句よきり
れ伏あがよれりてさるる一とありと云く一
事三句の難ありとむとありと云く一と云く
古法よし今もその沙汰ありそのゆいしむとい
よ後醍醐院の御時前白れ七文字よ何とやら
してあやよきといふ附よ帝不ともさるる
の目りげもさるるといふとありと云く一と云く
附ひに難なるに同極し遠乱よ及よ帝曰よの白
返りありしきりの一秘法ありよ民部卿入るの
云そきと極民をりしきりよ一と云くよ六に

何象さるるりやい極すとやと云く多るを離業の云
上手附ひ一とありをさるる侍よそ附くといふ
さるるりや越む二村の山と附く連なりそれと
戲感頗るり備に感歎す是を本歌宣渡三句
ありと云く本歌を後撰集よ清原法皇のれを
る何やよきりといふ二村山ありといふり
りよ故ふ八雲清抄よ曰一首に歌をよ三句よ割
て附く例のありしもの語三句を勿論のりよ
と云くさるるの附りいふりれ侍ありと云く
え燈籠さるるといふよ角力ちりりを撰もさるる
る前白の詩歌ありて侍もゆいし前二句よハ
蒼原血派の侍もさるるいし故ふさるる侍の
歌を附くしきりといふその侍よさるるいし
と見えありり次の白も又そのさるる山の迹を

れりさくして志うつきいそひ附しなり志のらきこを
は列甲賀郡くらふ山れはくまこ 考るま曰信ふ
燈心電つつつの白紙よみ舞の感しあひ何の志をり
よりのうくまを白紙のまらりやと同多ふ杜國云おとき
かうこれ弦よりのたのひよせしとこお舞舞ふ後
よくいしを心つけたりと慶初めりしとより此附を
津國ちぬあうしを燈をてつりの男志うひて
死よ及ひつる古き身をとりりる白紙を以とまこかう
この平氏の武士何うしの燈の幽霊跡燈心
をて振りし並りし弦の響ををおあみ古秋のさうらも
むすひををて一るれよよよとめつる燈心
えつてつてまよふお舞のなめあひしありむつる
はゆ若のるよとされよ對してるれ若をまよふの
帝の口十二のものありそひの角力より取出し

まらるるあるれ古き身ふ合休して附つるまら
若くまは附つるあふ古き身ひつるはつらあきし白
れ表ふうらつる古き身二つ別休お娘とまふは
つの子らりるりもつる三白れうちようく心を
つらつらほつるまよふ元若くぬを娘といふ
る

舊 妻 へ 音 一 滋 笑 樂 の 坊
於 月 夜 双 六 亦 此 旅 寐 一 一 一

愚考の紫真樂の坊 聖武帝初基よ勅進を
して大佛ををほつらしめあふ大寺の大佛
る即是を移しをらるるの故よ坊といふ又於月
夜といふつららと和歌云若抄よ夕月夜ハ對
すりとあるまきく人をいふと文よるまきく
と云く 愚考の俊の説いふり一萬紫亦一徒

版る京遷千寧小宮時略して云佐保川小
いゆきいをりて我疾くいふ衣の上ゆ乾月夜
云何そ我翁入森忽あくらむや
志のふら孔業として雛を泣けり
今婦の君より米なるむとあす
一書よ雛を泣けり世をぬふ人を是必やこ
ころのきいれくい形く一とて入命ぬの君よ
いよあそく見はき然と付たりと云く 一書よ
あの子をやとて人の怒りて面白く
いふあそく見はき然と付たりと云く 一書よ
志とていれと心得るをぬき
よのきいれ津波の水小波はゆき
一書よ米のねりれを津波のぬとのえぬ
るくく精くくあり
一書よ米禁裏あり

のゆすくみ米と執りしころ 愚考 雛を泣けり
といひ命ぬより米をりて然すとといひ只人なりぬ侍
るりよはるみを泣き大伴皇子の侍とせり
十寸鏡小曰大伴皇子事あつて雛波の津小
あそくいれ中略そのけ言波といふの吹入てり
浦あそくいれ荒りい供れ人いよとといふ
るく成あひい云く私よ云湖を津波るり又
洪波あ十寸鏡小ゆはりて略す命婦を官女
れ内五位以上を帯を内命婦といふと云く
佛吟よきり魚解ききり
一書よ潑波國の浦とやらよ鯨の大
魚あそくいれよ志心傷ぬのゆ佐の佛像
を腹中より出くくあり
一書よ潑列志度の浦長田の佐平志空上人

のすめめして一心念佛修行者とするなり或時
志度の浦津波もして法よ歩みある禿の
腹よりの慈心此所の弥陀佛をほめること云
る事ありふとくとあきまらるるなり

縣あり花見次第と作りて

一書よ花見次第といふる日向國よ何次第
とありつる家あつる者のありしつる近國よ海
流まらわとの花見を信ふして名をあら
まらるるありその後名をいへて花見次第と
と仇名をとり強つるとも田舎よ古いといふ
事あり

一書よ次の畠六なる彼のそと
の地方多く持つるありて別よ子細あり
畠邊や矢判の橋のそとこへ
庄屋に松をよめて送りぬ

一書よ平向のあらぬ長白よそ短白よそ
も一書よ一白ありそ白れなるなる白の白
ともて差別あり一書あり

一書よ畠邊に橋
ハ技業第一の長橋ありて長さ二百八間矢張
の里あり日本武尊東征の時矢を流してあり
よりのして水の名よ呼まあり

愚考平
白よ長短白よあつる武尊一書あり
とる神心の迷ひあり畠邊やそ名所のやこ
ゆよぶともあつること又日教白を母よよ長きか
る心別るるゆよなるるなるれかると同意
のなるる決してなるるると志る一近頃の仇書
よなるると揚るよ白なるるを出入りむのやうな
るのるはる上よをやりとるれりとも万よ
一ツを本よすりの族ありあつる矢止るるの

少しよりそのめふ華を費しぬ同一面の
見渡しをさく法として文字を改めよ増て
況や両頭ふれりてをや家よ

詩商人年丁を人賣ふ酒價此 其角
冬 湖 日 嘗 て 駕 三 鯉 翁

少のぬれ白と服を白ひと揚白よ
詩商人花を人賣ふ酒價の那 其角
春 湖 日 嘗 て 駕 興 吟 翁

少しより首尾連環の韻として別の叙向を
りしめり少しよ同意の格式あり
揚白此系トよ番一 一書ふ矢矧の里
庄屋の意前ふ大さこるる松竹てせよある一往
来の旅人求めて見物しりこの享保年中の
焼失よるくありしととさきえその松み對して

詩歌連絶の風雅をよもいおれらるとるり
捨し子も柴蒨長よのひつゝ心

晦日をとさつて 刀賣 年一

一書よ老松の壽よよせりて歌よみぢりて不
圖吾子のるるをれりぬ出ころさるるり表の
つとつらう余美るく捨てりし子も今も
定て成まして柴蒨かとの業もやあるおとこ
いよこの子をえんふやふよさるるりよをまとい
歌の意よりの身ひ出ころ心又小町のりころよ
秋さつしる都よ何りとは塩のりかのやのきれい
らの松を賣りき此歌を添て小町を捨てり
ありきよのまて松の一字よの解よ使あり次
のりも浪人の賣り流り子て室代の刀を賣
て年の用意をとむとるり

電れ狂吳の國のやまめつらうた

一書よ一物して名利をそと取き刀を賣て世を
風流の道人と道なき心より古人の詩をこれ
かひ出さるる心惠宗此詩よ笠重吳天雪香輕
楚地花 一書よ東坡るもの詩よりしてゆきの
あししの賓客と物しつら吳國の詩狂人雪の
真よまうして訪よを秘笈の刀を酒よ代て餐
應す信友の交わり有り待よ黄金不多交不深
とましよまてんあ朋友よ信なき人の落情をも
滅めつらう一吳國の笠とまき麗々朝鮮の笠
東坡笠の類るる一 魚考先注の刀を賣
か人の詩をこれかひ出さるとま非るり白ひ附て
風狂人此来まらう之後の注の賓客も又非るり
朋友よ信なきまんとて秘笈の刀を酒よ代も

お遠るる一彼刀を賣て年用意するおりつその
東坡笠るるむ寄りて風種人の来らるをめつらう
よららひてりて有すまらるの云友をたより来
ま又あの一つはやの語よも存合して一陰風流
よ見ゆらるり此刀賣年此年といへ字をいう
見ゆららるる妄言をハひよそ

襟よさる尾の 庁袖をとく
あし人と襟をと襟よ香かさむ

一書よ彼電見れ此狂人よさる尾の庁袖を
切て襟巻よあつとつら後よ無あら大いむと
全盛との仇らら一あり次のうま則揚屋の
侍よして客よ劉伯倫の詩の意らとをさる
つら劉伯倫性嗜酒嘗携一壺酒使人荷鋪
謂曰死使埋我

芥子子此一室よ名をたるす禪
魚味堂日色懐よ懲ふるを禪法よ精して
一休禪師のいさく成道する時絶書よ
よそ一芥子の一室を添て本末の面目坊の
立すのく一目をより哀とるるもの傍
のよ似たり

三日月の東をくく禪の聲

秋湖のすくく琴のすくく

一書よ一室の芥子よ禪の宗るる黄昏時分
三日月よ禪の宗るるよよを宿次のる西
山よ三日月をくくのめ東よ晩鐘をくく
湖上の浪舟書を惜みて琴弾すよよ
ら心一書よ芥子の一室よ入相を法行を
常の心るく心次のる三井寺とけりて

秋夜湖水ふのそみ流風徐来水波不
無飄々半ぬ遺世とくくよ赤鷺の抱
をたれひ出らまていひのあそひよ琴
やるのくく心と志きりよ入聲て忽僕をくく
その琴をくくをひくとすよよ
るのまよよ千眼一統の場をくくはるまよよ
端を無よ案して憐れよよ傷めてまよよ
時をたや無をくくれてひくその傍よよ
例のよのぬこ向上の身候よよ尋常の人
のたれひよよよよよよよよよよ
やう思お遠きり三日月も禪の聲を西よりて東
の方をくくくといひるるり次のる三井寺
と定て湖上の琴をくくといひるる白虎通
小曰琴在南方鐘在西方琴り一寸とくく夜

ちし同一を弾く寸をいふるなり近却の意
よひふをいともその形一源成松風の巻よえん
のひもそつてこのきさるくも又また金とをくら
ひ引く一そのおん分のさくちりあふと云は獲衣ふ
日琵琶をとりよもて姫君のあまてまはるる二返り
くうり彈ありふいしてまらるるまじきをなをなげ
唱歌まらふんやされてこのさうてしといふるこ
まらるるして時うはる又論語日子與人歌而後必使
返之而後和之

烹ふるをゆるしてをせを放るり
声よりき念佛 蕙ををぬくつふ

一書ふ前守琴不しくて借るれとも彈くそ之す
とりふをきくふ階てそのをせを釣きとをつわ
これとも釣得て見違えはや喰ふ心をくらくて

よりせ差るり助け得さす一と教生の白ふ依
るて心不ぬのん見識をえきくらるる一一次ハ
前白んをを釣つとりふり教心のくくらをえ
きくつり一略 愚考白虎通ふ曰琴子禁示也禁示

止於邪以正人心也又風俗通ふ曰琴子之爲言禁
也雅之爲言止也言君子守正以自禁也又文以
正雅之聲動感止實故善心勝邪惡禁示又樂
書曰ふ曰琴動天地感鬼神その同一とら
るるをいづく度もしく引く一寸を不のくふ服ふり
ゆつ流るるふ後日釣くれて今やうつらむと
すりよ湖上の曲声ふれとあきき番れ魚をの
ころらん流中一歩流るるさるるなりはて琴れ
徳をさるるしうふ志る一一次の白を又なるふ
ゆふそののをせを放らるるそといふふ教藝の

急仏を亦守てをめて後世をせん教を以て
教生を以て其甚阿やりのことと苦心よひらうりて
旅ちゆりて又急仏の徳を何れかきしるり琴
と急仏といひて申のんせ給れ心を改悔しむ
先琴より將く急仏をまきしゆへよ前白一首
て後白一首集ふらりのこと是らるるを此日三四の要
ふこの集 花 魂 心 形のうけよ
その集の目をと我もゆるりく

一書よ西行上人妙のそらく急仏をよめてん
死る心そのまきしゆへ此を月のある二白と
その急仏の意よして祖公母もその目をとゆるり
ゆり心まきるり 急考揚るるその急をゆるり
あふらりてしゆり急の白の全体西行れ急る
のゆへよそこを急の引色みして依り急妙也

山家集よあくるり心をとてまゆり
ちりる心れちるて方よる一手此急をよく味
ちよ一一人れ急るゆへその急れ目とゆるり
あふらりて急る人の目くらくらるりしと急感歎
すりよあふりあり但一首あてま二首と足る急
後のとんりよ急るる急ある急い急急るりとも

るよ波津よ何れ火焼急をすけれと
一書よ万葉集人急れ急難波人若火焼急をす
けれれと已の妻急をてとめ急るりし
急賣のたの急妻急を急るり
一書よ沙の急き急の急い急き急急急急
急をいりて急る急る急る急る急る急る急る
急る急と急る急る急る急る急る急る急る急る

道も多しあり又回書よ其系を田子ひのせ
て里者一 宗因を山に松を垣みしてゆき
後一 專順 道の里の茅植機をみる 翁
家から此第三の白あり存るありあり
誠は第三の白あり一これゆく依りて第三
三よ道りの論ありと云く 一書よ是を五文字
綴名の第三ありてよまへ入らぬ五文字を
又備をれよ中く一書一書れを一書一書
ありてよまへ入らぬ一書一書ありてよまへ
七を此位ありを心留て白依す一と云く
愚考の後の論一向よまへ入らぬ一書一書ありてよまへ
五十ありの三つれ依り言有第三の意味と
いふなるありあり一書一書ありてよまへ
といふ白法よて依りて依りて依りて依りて

るありの依令十三条の法よて存依りこれハ
とて第三の形らありありと云をいひて
筆後をて却て字とりて一書一書ありて
ありゆい得るありと云と一書一書ありて
何つてありてありて可なりと云ありて
て第三の本意とすといふありて得ん余をい
安く得らる一近きありて第三の書
ぬ仙書をよる一書一書ありて第三の書
鶴 一書一書 窓 此月ありて
一書よ花蘇を窓先の生垣と見えあり
もれありひよをて勢ありと云ありて
幽入林和靖の侍をふのめををりあり
と云く 一書一書ありて林和靖

の侍やいありきよる潜よよりぬありて髻を
 附しりるるり焦氏筆兼よ曰鶴愛陰思陽
 易ふ曰鳴鶴有陰故从雨鶴好霜故从霜
 せよ進ん書よ附しり雀るり解ふ雀るり花
 の咲るの系物るりすよ月花をれいともあり
 風吹ぬ秋の日瓶よ酒るき日
 一書よ秋の日のさひしきよ風をうらみ瓶
 の酒さひるりて寂莫のさひにありとよ
 鳥さるり風をうらみとる大よ非るり秋の日れさひ
 しきおろり瓶の酒さひるりさひにありとよ
 進んるり吹しりいりるり必ふぬよを
 早のぬとさひしき又一書よを五柳先生の侍
 るりとするるり程し非るり
 萩織る 笠を市よからすか

一書よ萩の花笠とするる非るり萩と萩
 との写し透ひの 一書よ酒るきとひさひの
 萩のて造る笠と市よ出して賣らするり
 かしらする振賣ると回前るり
 加茂川や胡麻子代系微道
 一書よ上加茂の川上よ稲荷の祠有此神の
 好ませりよとてそのあしり悉く胡麻を搗
 る一書よ搗るるり一書よ此まはるりを胡麻
 子代おると云るるり又子と母の社とありて
 一書よおれををのほるりこれと見せり
 不備るり稲荷の多加茂のま社よて九月上の
 午れ日よ此まはる
 いとららの舞あつりの
 一書よ岩倉るり鞆るり近きあまそ加茂も云

舎を造り居るのそまを鼻の墨懐として交
りたる必聲も亦一とよの附るなり 愚考の山石
舎を造り居るのそまを鼻の墨懐として交
りたる必聲も亦一とよの附るなり 愚考の山石
舎を造り居るのそまを鼻の墨懐として交
りたる必聲も亦一とよの附るなり 愚考の山石
舎を造り居るのそまを鼻の墨懐として交
りたる必聲も亦一とよの附るなり 愚考の山石

おのりしる市橋歌よ笑を述べて
うきしるをいれを越えよ上平

一書よ笑を述べてとつしより悪女を降しり三平
を三平二満とて乙は前めりなり 成美曰山谷の

詩よ三平二満過則休 愚考二十と限りしる
多礼記曰十五而笄二十而嫁故あまきく二十三
花よ位機の懲と捨よけり

一書よ機の懲のちり跡をたれりいれりて過去
花を祝想ししる附る心或智識の曰仏

この法よ懲りよりいれと示しあり
よしりよりありけりとおのけりさるなり

一書よ機の懲り衣のいりる衣の敷き
懲り有りと云々 愚考赤白杖よ居て花を求め

あふる祝想心裏の妙華よりて以心傳心大切なり
陽と影ととるく現とるく探り得り花よ

と叫し拍子よ彼納豆をく考ふれと
ありし全心の返してんき人皆を茶世の

機よ懲りし妄想よりと弁持あり熱んて花よ
泣と虚よけりありと次の依老その胸臆

をひららむと歎きのうはまら水を進めり
あふるを減よ菊水育心の志句感歎す

よ絶り花のいれと讀てよ一白れ情を勿
論前後のうけりりも是はらるなり 必

徳の字は書換ふ宛あり

傳ののいらぬ歎きをのむ

一書ふ花の記あるは言祿降るをを見出
しとて心傷正遍照いよしく良峯の宗貞と
やち一時ぬ色をうひるりて宗貞帝後の姿
て歎き色のみ衣をてらまては炭の中よほ
しとて宗貞けさうしとてやまてはさう
とて宗貞山吹の花の衣ぬしやまてと
とて宗貞と詠ふとて虚栗山吹や言祿降の
捨衣季下衣の疎礫色をくらとてしとて
ゆのこ此の山吹とて茶をのむるは
一書ふ香しけりて山吹の或るは
るりて茶とて見まて香とてしとて

とりて

徳考れりて

事とや釵まをの徳をて此を女を生し
をれとてそのまをて釵なり
成美曰西京雜記曰元后在家嘗有白燕銜白
石大如指墜后續筐中后取之石自割為二中
有文曰天地后乃合之遂還合乃宝釵又遊仙
窟ふ白燕飛來白玉釵一書ふ白燕を日本に
るきとて宗貞とて玄宗皇帝揚貴妃の釵を鑄
さしてありとて云々 徳考非なりを白き
を稀なりといふも既ふ景行天皇八年天智
天皇六年清和天皇八年白燕を獻るは
燕雀の類をとり見り事ありとてそのまを
ゆりて倭姫なり和漢語といふ女部ふ云
伊弉諾宮神道之大祖也日本神道以天女

為根本則天女と云々倭姫ありと云々日本神乃
の祖よりして御歳五百余歳ありて石隠あり
今此隠之國是あり本朝に及の貴女と謂つ
て一に倭姫と云々倭姫世記等を引いて
いふにをら守りてとて此まゝをせよと
多野の宮より三年此故ありて既降り
日よありて天子自ら根を根宮の山嶽に神
加ありてを別よのみなりといふ根を串あり
若あり伊勢の根田川を倭姫の根を
ありと云々ありと云々根田の神社あり

八十歳を三つある事あり
一書ありを鑄るといふより初符に即位の
と見え入法國より其壽の人を
老業子の侍あり又そのよの事あり人余信

とも事ありと云々是未解と云々
食飲の給あり折然納を
魚を煮たりと云々
敷くありと云々
ののさりと云々此執事を
のさむと云々山吹の
のさむといふあり高青丘
樹中一樹今日誰共園是
拾遺集より山吹れ若然
はらひけりといふ井出の
若の孰のさりと云々氷を
のさりと云々入と云々
時鼓園湯羹待字士者飲
坡の門を之飲等其例あり

白燕 一のりらぬ水も母を造る
宣旨白一りらぬ 釵を禱る

一書小白燕を深山の落澤の地も栖るる乳
く山吹のりも不ひより水の落るのりもるる出
くくも本本草云人見白燕主生貴女故燕名
天女次多洞冥記曰漢元鼎之間招灵閣有神
女留玉釵与帝帝以賜趙婕妤至昭帝元鳳
中猶見此釵宮人謀欲符之明日視釵匣唯見
白燕外天 一書白燕の一名を天女とてい又白
燕を又見ると貴女を生すとてい故事も物事
るるその貴女よりして釵を禱ると例の例の
下見ると附るる一りらぬ此宣旨一りらぬ
てかみ初巻のりもるるを造るる一りらぬと
ゆりのるるぬ釵と虚ふ例のりらぬ

ふりらぬと云く 一書白八十を三つ見るとい
一と二頁は十葉その多ふ母ありと見ると思ふつ
く又上の八の字も批考のりらぬとて非こ
又八十氏川八葉禱るるのりらぬとて只数の多きこと
りらぬ又七十三才もて八十を三つ見ると八十を
三つ見るとい説あり是も思ふとて思ふとるる
号望日多喜安元法眼のりらぬ白燕を禱るる
すりらぬとるる肥熱城中も白燕あり城へ出るる
るり予らぬとて是も思ふとるる白燕を禱るる事
三夜法然上人の説とて雜事を集るる書れ中
も曰夫和國竹林の巖上もれいて勅して神武帝
の玉釵を禱る法同もれいて多ひて百葉以上の
男子け親を禱るるのりらぬをるる集て是も役を
是玉冠を禱るるのりらぬ竹林巖もれいて是

て後ふるる一し粟洗ふし松子のかきり縁語ありて
一入ありしるし

報手向致 弁 慶 此 宮

一書ふいなり正月の食持ひよその國々俗を
陸奥の果るるく見出して弁慶の宮ふ林
樂報を打て手向ふるる一し一説ふ未殊
るしを致ふ包て手向ふるを包手向といふを
おそくくくくく

寅此日の目を報治此意起て

一書ふ弁慶の宮あり見入て刀工の成仙
を祈是名依を報一むとたひひよせ寅の
日の未ぬふを清めて系語の縁く
一書ふ台命を起りて名所の叙を打て
と意報を起すに私のちくくふ及はされハ

冬五十五

勇者の社ふ報治して寅の一字を報起の
箸ありしむ 愚考名所の叙とくありしを名
を弁人の別名あり于將莫耶天國正家ふ
ありしるるその人の名あり私のちくくく六れ
よひくくくしとるありしやさふいふ人ふ台命
をやさむや又寅の一字を報起のちきそ
むくしは名所報起あり夫天を子よひくけ
地を也ふいけけ人を寅ふせり故ふ子よ所寅
ふ起るる天地自然あり寅を猛獣ありて虎を
司り故ふ寅此日を報ふる刀工の者あり一
寅年寅月寅此日ありしる刀を三寅と号し
て伊豆控現ふ綱ありしありせりんん寅ハ
一分此眼あり

雲一のくくくき 南 東 の 地

一書に南京を南都をいつるありし書
を刀工の多く有る事と云くも
手くる皇都の地なるけし
一書に于將をたむの南
ら心南京を来吳の地
吳の于將を非るる野
必定なり

あうきくして遣はるる人の像

一書に太閤秀吉公の
の像るるを今を
魚味芥より以別論

水の方よりし
福らまぬまを

一書に神祇の名
安るるむ次をその人
りて二白一
武士の建てた禮の上
土もなるるの堂上
禮よといはるるの
物衣の体とせられた
衆物語の体といふ
し何そや神祇を
るくしや押中
季よむすひて
ては月う七月
といふは四月
ては別は月

——く論す

田家賦を

霜月や鶴の行くくまらひ活て
冬これ朝日れ ちんまき有り有り

一書ふ此服を余懐紙毫ふほつてくくき
の目れ歌号も是くく附くくものーやきふ服を
いく度と此方を味ひてすのよきこ 一書ふ
その服え就の説ふそめて翁のえ出ーやれ
まのめくーみよて此初まーゆふよ有り
まのと只将く云流ーやされたりと有り案ふ
此方る物と好く古代の歌の上れ白ふそは
併りれそ下れ方の心よて有り有りといひはけ
まの心 一書ふ鶴のほくしあふひそてといふ

よて白ふふ表をえをくくその氣懐究て終こ
それをしてまき有り有りといひ 意味余懐
いふ一く不可説くくしーて是を解する有り
却て第二義も落一き有り下略 愚考例考も
是かとまきふたと有り有りこの服をめて歌号と
すのとる古今れ歌説有り故ふ家部ふ歌号の
誤を論一き有り有りこれのいひありて一
又服の白余懐紙毫ふそくたの不可説く
是を解さん却て二義も落れとる愚味と
文盲と此上や有り一き服を不台の余懐を
らん守の本侍有り若不有りそとけ有り有り
一書余懐のありて有り有り鶴を水鳥暴風集曰
水鳥者稟陰鶴鶴亦夜鳴又禽經曰鶴伏鳴則
陰竹鳴則晴又酉陽雜俎曰蛙抱聲鶴抱影夜半

進すは故よ引はるるの引はらまひてけく牛
るのまをたもらうまらう一花のまをり塩の六
ふりりるの要言故事曰埒雅曰牛走順風
馬走逆風

るまぬき、具足小月のうすし

一書小陳登れて塩と見え、て書なる事といつて具足を只
飾り並みとみえ、然る甲斐の軍場の侍も見え、侍の
通考大いよあ、一も通とも牛れ、詮といふもの
見えぬ、然る引はる牛も、然る月の塩も、陳中
一もれ、抄、採るるの意、ていふ、いや、月を定むる事
とといふ、むる月といふ字、を非入用して、け、建ハ
吳名の月を、あ、そ、出、す、一、も、建、月、の、字、三、る、と、そ、
あ、り、り、世、法、一、も、ふ、ま、あ、く、け、や、十、四、文、字、や、十、七
又、字、も、そ、涼、紗、の、ま、味、の、あ、ら、う、く、く、よ、か、と、腸、を

のまぬと解きぬるの世説新語補曰奮云臣猶
吳牛見月而喘又風俗通一もあ、り、吳れ地、六、南
の果、り、一、て、吳、甚、一、牛、の、斐、も、一、心、ゆ、一、月
を、見、て、も、又、喘、く、る、の、と、云、故、よ、月、を、見、て、交
ふ、道、よ、ぬ、と、引、は、ら、と、云、踏、つ、る、れ、ら、り、此、月
よ、そ、引、は、ら、牛、を、れ、ら、ぬ、物、ら、り、と、知、一

酌 ころり 草 切 い

幽蒙集よ草切よゆいと書て出、一、も、云、語
ゆひ、る、り、予、た、ま、ら、く、なる、の、故、あ、る、て、る、ま、ハ
必、見、渡、一、を、忍、れ、そ、の、も、ら、む、を、る、ハ、居、て、る、り
是、を、草、切、よ、出、く、り、と、出、と、一、も、れ、蔡、懸、隔、一
一、書、に、血、ま、の、酒、臺、と、競、向、を、定、め、大、將、ふ、陸
身、の、臺、弘、の、花、を、ま、む、と、す、り、白、依、草、一、き
余、懐、ゆ、り、此、注、る、と、云、無、蓋、の、編、る、れ、と、新

何れに於てその罪を犯すれども

秋に旅の以連歌いといひあり

一書よ新白の草を席上の活花るり定まりて

比上流の日向波沃柱朽ちるを其見の間の以連

歌るる心 一書に以連歌といひよりの法見寺の

をりての場を究て三國に双の不そと僧より旅

の一書よ力あり 魚考法見寺とをりての心

いふるは先住をそのやういふ云ふをむらむ心

見ゆり寺を建てててまよいとたひめての法

河の肉れ寺をりて法をえさるるをりての心

よるよりの心ありて決して海ぬるこ

又うこさきよる心ありて定りて相刻

よるよりの心ありて力を入る心

見ゆり寺とを禁するなり一書の字のうとまきり
上よ東海道をりて見ぬるここれるるなり次の
心ありて海ぬるこ

一書よ新白の草を席上の活花るり定まりて

比上流の日向波沃柱朽ちるを其見の間の以連

歌るる心 一書に以連歌といひよりの法見寺の

をりての場を究て三國に双の不そと僧より旅

の一書よ力あり 魚考法見寺とをりての心

いふるは先住をそのやういふ云ふをむらむ心

見ゆり寺を建てててまよいとたひめての法

河の肉れ寺をりて法をえさるるをりての心

よるよりの心ありて決して海ぬるこ

又うこさきよる心ありて定りて相刻

よるよりの心ありて力を入る心

雑遊よ 鳥帽子の女五三十

一書よ新白の草を席上の活花るり定まりて

比上流の日向波沃柱朽ちるを其見の間の以連

歌るる心 一書に以連歌といひよりの法見寺の

をりての場を究て三國に双の不そと僧より旅

の一書よ力あり 魚考法見寺とをりての心

いふるは先住をそのやういふ云ふをむらむ心

見ゆり寺を建てててまよいとたひめての法

筋め轉助時但呼木瓜名亦上書木瓜之字輒
愈留よ花を多為梅の曲なり公卿の因人よ
てたひすりるり毛路の山旁をいふくろあらむ
とたひいけけけ行かるとよ幸ひるるる山
よそく人ま見えんは解よ木瓜の花の盛よ咲て
よふて見え花雲より出よ一葉あらまはらよ肌
るり一多て持よ秘菫の留を一曲花はさけり
らりら花を留より重よ一歩拂ひまよ侍るる
よ一木瓜といひ山岡といひくろ一鬘固の武士の心
智を誇るるり一多るるる前よよ不吉の花を
是ハ次よ骨を見てとき附よよるり
と食の 養ををりらよ一之のくめ
一書よ骨を見てといふより戦場の侍と見て
その由緒の人のとくろを葬らむと心付そこら

よ活合とくろと食の養をを交て骨を包み
て誇る心とす人の侍るり
沈れ上よ尾を引程を拾ひ好て
愚考骨を包むといふよ養をよ一たのひけ
るく拾ひるる程を包よむと奪つるるり
此がよむけり一き注釈のまよとよすよ及よ
清幸よ進む 水れみよすり
一書よ美濃國養老の遊る心とよ清幸と
見出し活程を献よ余膝もあむ 一書よ
魚をゆるといふより一將よて川野の清毒と
清りる泥のひきよ典業改水毒を解す
よすりるを多りよとよ後らるり一
成美曰
続日本元曰養老元年詔曰朕今年九月到
美濃國不破行宮留連數日因覽當老日都

多度山 天泉 自盥手 面皮 層如滑 亦洗痛所
無不除 慙云々 愚評いしはまよふまゝなり 才者
よりのりなり 愚考 小角豆 炭團 芥子 何方蓮の
実月の帯 狐釣杖 此七のれ侍を法しし 思ふよみ
る能の侍りし 紀りを書つる ぬしきまはあそ
川 狩野信之 此書とを見えぬる 何の道よりし
何の侍りし 天子の行幸と書つる
雲 ねく 狐 煙 やうれ 一き
愚考 狩野信之 此書とを見えぬる 何の道よりし
帝十六年 世于んをキツ子とをいひ 姑一と五雜俎
曰 巢居 知風 窠居 知雨 狐を穴より居るものなり
と 雨をうけし 一 苦るるを風をうけし 一 夜も
涼更し 及び 秋天 沈りて 玲瓏とて 露の
一面より 並わし 一 思ふるを 冷風とて 一 思ふ

ねる 世を 何と かく 白は 砂の いろし と なる
ふを 狐を 一 雨の 一 思ふる 一 己の 窠より 水
の 何と 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
住る 何と 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
何と 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
を 失ふ 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる

是 齋 何と 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
え 改の 草 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
一 書し 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
何と 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
を 上代の 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
を 何と 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる
よりの 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる 一 思ふる

孝心あり人よめて蹇の母を肩つひ身延山に詣り
記りの神教世よ初より燈流の才物法華一派
の師ありの状を続徳遠傳ありと書し
曰之改を素根彦の家士俗称石井平之丞二十六
歳よりして薙髪為僧源孝徳光寺に等剃寸四十
六歳よりして寂

藏美

伏見本 懐 の花をうへ

愚考源孝の花を伏見本懐の入相のうへは
花やらしきと伝ふり源孝よ是源懐とて名来
有り古今哀傷の部源孝此世辺の様し心
らえきしと伝ふり源孝よ是源懐とて名来
あり是世をまひしり何等懐のよありはるり此
歌よよりしてすみそめ懐とて名つげし有り
本懐とてユワタとよむし一方はよ強田と書る

卷六十四

志道歌

いさつらき男猫ひらを控ひて
雲のちりすれ雪をきくとよ

一書よ入相ひの以よ男猫のつらさを女
原の多はねとよより次れ白を猫を
き氣をたそとよのし一雪掃をよより
家よ女三の宮の侍るよとあり
男猫と押出して白伝るよ雲の猫の本懐こ
まよ男猫女猫を恋ひ林よ女猫男猫をうへ
水手を秀白れ雪若やのみ
山棠花よわよ雪の本うし

愚考此二句則冬此日一部を巻納めしる白
ひりし首尾連環の格あり巻改の狂句の
二字よわしる秀白れ二字ありと書し六狂句

の二字を大切の字眼をうへ傳ふ曰揚白ふ
はしめて物を起さく出の揚白をいめて冬季
を出すとする二白一書ありて巻改の本うつ
し眼の山系花を合せて秀白孔を狂白
の連環るりの中ふ格外の格を出せんとし
めて自在を留るとる此るるり近年に傳書ふ
揚白ふはしめて出白を出し或るをいめて
赤みさくを出するを傳の族らり一し一折ふきよ
一卷のりもきよ更ふゆりさく出の揚白を
例るるり一格あり格弁弁ふ出を漢をい
いなるり取存しややふふ一う改大切の要なるるるを

追加

いふふえよと難面ううをうへ散

一書ふ牛の純ききりのふ霰の烈しきを統
白とせり電者砲也中物如砲也下略 愚考
夫木集ふ荊小田の野の上をふら霰玉を
てきんをうはくとそり又行助此古歌を
いふし玉をりてきを内中の霰を如歌
といひ連歌といひ只一白のむらみふの
執着して殺伐ふ落しそを我祖翁の
多のりてりる仁懐の境ふ多ひけまハ
蕉風の世とる一統をり古人の肉をく
りのを常うしてひらるるの字をくらの力
はよくして魚るりとまをきふ折あてをら
むるいおくむと牛のはよきこのふ折を
はれりといふるるあつきの存るるり

揚白ふあつ

枯系れ

一書よ牛追の世に宿るなり今津一書よ牛追
油をくを能く一附出す小牛十をとほく連
よ追りた能くも牛の骨までてぬまの油を
油の皮とす牛を煮るを煮るなり一斗一牛追
飯に後煮よ芒をくして煮るなり一斗一牛追
と接ひあつて焼く酒を煮るなり一斗一牛追
めをて休むなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり
牛の皮をくして焼く酒を煮るなり一斗一牛追
形跡の皮をくして焼く酒を煮るなり一斗一牛追
一説よ曰樽を火桶のまわして煮るなり一斗一牛追
お出るなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
酒を煮るなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
よりの俗此のえ火をくして樽火といひ煮るなり一斗一牛追
て樽火焼すよ樽火よよれるなり一斗一牛追

人足の者の初なりお根をくしよりのて休むなり
のちのきまはりの樽火よて松の根を焦すなり
煮よ焼焦すなりお根をくして樽火といひ煮るなり一斗一牛追
はるきまはりのなり
本紙 菊 一斗一牛追を煮るなり一斗一牛追
一書よ牛追の白くして本紙 菊 を見え出
まらるなり 葉先整る油を煮るなり一斗一牛追
なるなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
るなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
焼るなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
るなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
るなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
の油法をいふなり一斗一牛追の皮をくして煮るなり一斗一牛追
のりれお出るなり

松笠ふ宮をやは守 形 五
一書ふ山嶺の体よて用明天皇いりし皇子よ
てりししきり時彼玉代姫を意ありて葛ふやは
しきり侍るなり 一書ふ宮方れは麓のりしりて
供奉のりし侍るなり 一書ふ宮を立てりし侍るなり
一書ふ大塔宮なるの深淵と見えしは松ふ
拾遺をむと形む次を焼塔の素名と定て
左ふ塔をすりし右ふ波阜山をえりる眼前と 一書ふ
表よりりし侍るなり 名不地名をいふる是等蕉つ
の守るるなり

附て云冬の日多詩六曰次韻の風調ありてた不
よその人れ解すつきりのいふ何れと書置しるなり
とるを種くしの注釈出来りて却て俳諧を害くふ
至るおもかりし故ふ難陳なりし形きふ及つる上
たれなりしも殊ふなりしと古集の解しありしを
今れをいふの上よ及しれ証もるし見えしを
とるを述をいふふとして言誌めむとすの筆解一の
とるるんきひしきりしあもをるるなりしと述を
しりし形より私の宿意ふありしと述をとすふ見ゆ
なりしなりし

落注
五形 葉 此 七 げ 六 反
息考前白縣より花え次序を百燈の大家と見え
其肥等れ附るなり 見原氏木曾流の肥は美濃也

納より西より手田よりして野原外へ
節へ一寸草形一田畑よまむけ花とり
植て株とす又より蒴取て田肥し
より一寸草形ととりと云く五形草と作り
をむる俳諧の虚なり先注の
草と見て荒島とすり云く
國法をとるる罪人なり

